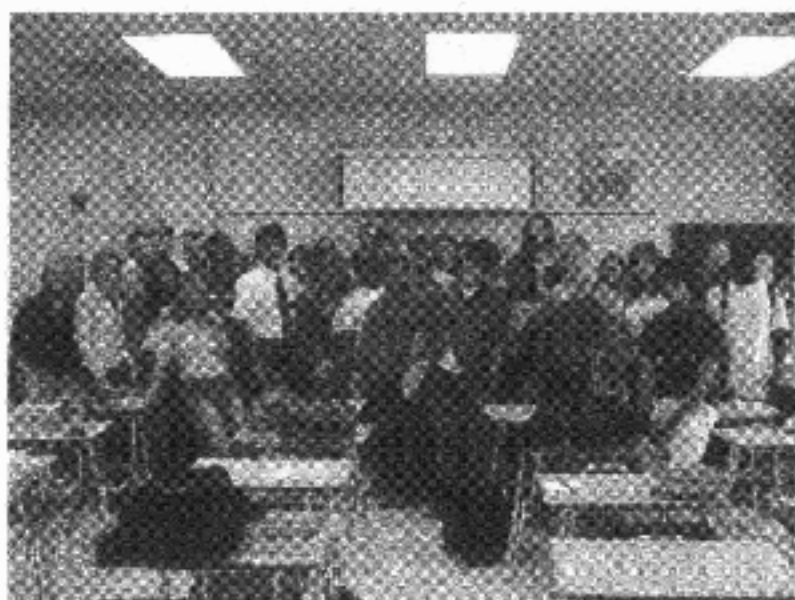


# グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト ノースカロライナ研修報告（2002年8月17日－8月29日）

大阪府立池田高等学校 教諭 吉岡 宏

## 1 はじめに



この写真は、Ashley High Schoolのあるクラスで生徒たちと撮影した写真である。生徒たちは、明るく、そして温かく私を迎えてくれた。私は彼らの人懐っこさに安堵し、まるで自分の学校にいるかのようにリラックスして教壇に立つことができた。今回のノースカロライナ研修で、私は英語教員としてこの上なく貴重な経験をすることができたと思う。

ここで、13日間にわたる研修における小・中・高校での観察や交流の結果をまとめておきたい。

## 2 Williston Middle School

学校見学の初日、8月19日（月）にまず訪れたのが、この中学校だった。Wilmington 地区全員での駆け足の訪問だったので、細かい観察はできなかったが、学校の雰囲気は十分伝わってきた。

生徒数900名、教員60名の学校で、各教室に5台のコンピューターが設置されている。恵まれた環境だ。現在は、教室が足りずに小学校の古い校舎を一部使用していた。

最初に校長先生の説明を受けた後、図書室から授業見学へ移動しようとしていたときにちょうど始業のベルが鳴った。図書室で行われる授業にやってくる生徒たちと入れ違いになったのだが、彼らは驚いたことに入室前に廊下で一列に並んで待っているのである。教師の指示で入室するときも我々にあいさつをしながら整然と入室する。日本ではまず考えられない光景だ。

Williston Middle Schoolの生徒構成

	Male			Female			Total
	Black	White	Other	Black	White	Other	
Grade6	65	72	14	52	68	18	289
Grade7	82	79	19	79	52	16	327
Grade8	58	54	11	72	59	10	264
Total	205	205	44	203	179	44	880

(<http://www.nhcs.k12.nc.us>より)

続いて ESL（7年生4名）、Art、Language Art、Math & Science、Computer Labo、Mathの授業を息つく暇なく見学して回った。見たことを整理する間もなかったが、Math & Scienceの授業で生徒たちが紙飛行機を飛ばして飛距離を競っていたのが興味深かった。それぞれのデザインした紙飛行機の飛距離データを集め、レポートを作成するらしい。校舎入り口の階段に集まって、生徒たちは楽しそうに飛行機を飛ばしていた。体験型学習を重視する教育の一環だろう。これは7年生の授業だったが、集めたデータをどのように分析するか、そちらの授業も見学したいところであった。

Williston Middleで見学したクラスの人数は少ないところで26名、多いクラスでは30名ほどだった。アメリカの学校と言えば日本の半分ぐらいの少人数学級という先入観を持っていたので、少々意外だった。州の財政や就学人口の増加によるものだそうだ。

それぞれの授業の様子を長時間観察することはできなかったが、廊下を一列に並んで入室するという（日本の学校の風景を見慣れた私からすれば）窮屈なルールとは裏腹に、授業を受ける生徒たちは、総じて楽しそうに、また積極的に挙手をして発言していた。

## 3 Gregory Elementary School

Williston Middleの次に訪問したのは、隣接する小学校である。Assistant PrincipalのLaura Hollidayさんが概要説明と案内をしてくださった。

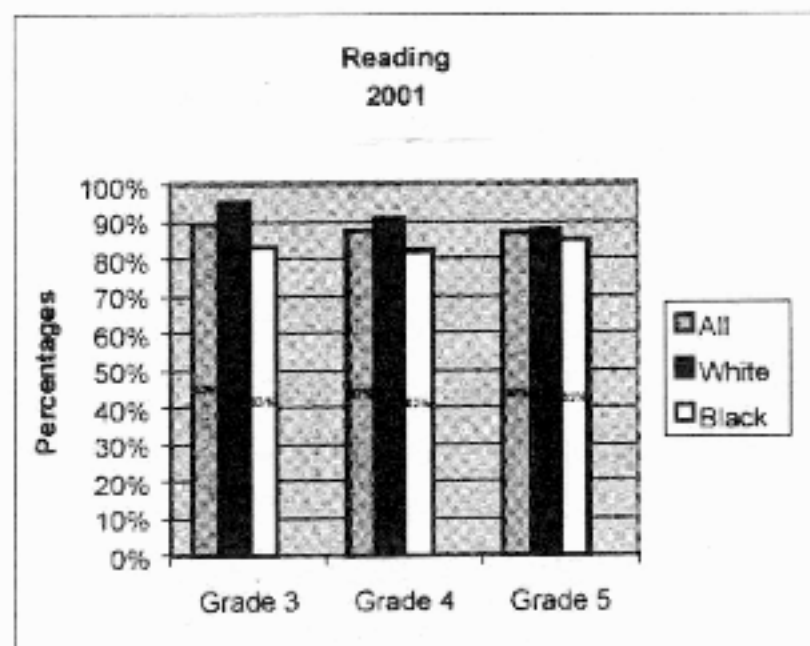
Gregory Elementary Schoolの生徒構成

	Male			Female			Total
	Black	White	Other	Black	White	Other	
GradeK	15	19	3	21	16	8	82
Grade1	23	22	6	16	16	6	89
Grade2	17	34	0	25	26	3	105
Grade3	24	22	2	31	18	4	101
Grade4	16	24	3	28	16	2	89
Grade5	20	17	3	28	21	2	91
Total	115	138	17	149	113	25	557

(<http://www.nhcs.k12.nc.us>より)

この小学校はmagnet schoolといって、科学教育に力を入れたカリキュラムを持ち、学区の制限を持たない。正しくはElementary schoolではなく、Gregory School of Science, Mathematics and Technologyという名称を持つ。公立であるが、プラスアルファの予算が配分されているらしい。入学は抽選によるとのことだったが、人種比率の規定があるようだ。

この話でも感じたことだが、アメリカではminorityの問題が常に教育の中でも強く意識されている。上記の生徒数の表や、各学校がホームページで公開している州による学力テストの結果においても、必ず人種による比較が見られ、そこに白人優位の実態が明確に記されていることに驚きをおぼえる。これは、学校が社会の抱える問題から目をそらさないで解決の方法を探ろうとする姿勢を持っていることに他ならず、我々にも学ぶべきところがあるのではないだろうか。同時にアメリカが抱える人種問題の根深さを実感した。



Gregory Schoolの学力テストによる  
学力伸び率達成者の比率

(<http://www.nhcs.k12.nc.us>より抜粋)

Gregory小学校では、食堂で昼食をいただいたのだが、その際、児童の様子を観察することができた。まず驚くのは、教師が児童を一行に並ばせて引き連れてくることである。私たちが遭遇したのは低学年の児童であったが、食堂に入ってきて、カウンターに並んで食事をトレイに受け取り、テーブルに着席するまで教師が全てを指示している。中学校でも同じことを感じたが、教師が生徒・児童の行動を全て管理しているのだ。小学校では、トイレに行く時でさえ列を作り、トイレ前で一行に並んで教師の指示を受けている場面を見かけた。

どうやら、これがこちらでは当たり前の光景であり、おそらくは生徒の安全を守るための必然の体制なのだろう。食堂の子供たちは何の屈託もなく、お行儀よく昼食を楽しんでいた。窮屈に感じるのは、こういうやり方に慣れていない私たちだけであり、学校文化の違いを強く感じる一面だった。

#### 4 Eugene Ashley High School (その1: 学校紹介)

学校見学初日の最後に訪れたのが、Wilmington市の郊外に位置するAshley High Schoolである。私はここで明日からの3日間を過ごすことになる。私のメイン交流校なので、少し詳細に学校についての説明をしておこう。

##### (概要および施設)

Ashley High SchoolはNew Hanover Countyの生徒増に伴い2001年度に開校したばかりの新設校である。教員は、Hoggard High SchoolやLaney High Schoolから新設に伴って移籍してきた人が多い。広大な敷地に真新しい2階建ての校舎が建ち、玄関を入るとエントランスホールが広がる。うらやましいことに全館冷房が行き届いていた。一階右手奥に進むと、広々とした清潔なカフェテリアがある。それでも一度に全生徒を収容できないので、昼食時間は2分割になっている(Bell Schedule参照)。食堂の反対側、1階左手奥には2階まで吹き抜けのメディアセンター(いわゆる図書館、右の写真)がある。教員が2名配置されていて、生徒へのアドバイスや、図書館コースといった授業もあり、それ



らの生徒の指導も担当する。全体の職員会議やその他の会議もこのメディアセンターで行われていた。

次に、我々教員に最も関係がある教室の設備を見てみよう。各教室には、それぞれ5台のコンピューターが配置され、生徒がインターネットを利用できるようになっている。テレビも設置されていて、ビデオやコンピューターの映像を全員に見せることができる。教員はこれだけの設備のある教室をそれぞれ自分の域として持っているのである。授業をする側の立場からすれば、いかようにも工夫できる羨ましい環境だ。それ以外にも、休憩したりデスクワークをしたりできる教員専用室がフロアに数ヶ所設けられていた。教員の勤務する環境がきちんと整備され、教えるために必要な設備が合理的計画的に配置された学校である。

施設の見学を通して持った印象を一言で言うなら、大変な費用がかけられているといったところだろうか。新設校だからきれいなことは当然だが、各設備の充実度は日本の新設校とは比べ物にならない。いったいどれほどの予算が投じられたのか正確にはわからないが、相当なものだろう。教育に対する行政の意気込みが感じられる。

#### (生徒構成)

	Male			Female			Total
	Black	White	Other	Black	White	Other	
Grade 9	30	173	9	48	178	6	444
Grade 10	24	156	9	43	174	2	408
Grade 11	12	97	5	19	103	1	237
Grade 12	—	—	—	—	—	—	—
Total	66	426	23	110	455	9	1,089

(2001 秋時点。www.nhcs.k12.nc.usより)

新設校のため、昨年度は12年生(いわゆるシニア)は在籍していなかった。私が訪問した8月は Ashley High Schoolにとって、最初のシニアを迎える年度がスタートした多忙かつ重要な時期だったわけである。人種比率を見ると、Gregory ElementaryやWilliston Middleに比べて黒人の占める割合が低い。これは、高校も小学区制をとっていて、地域によって人種構成に偏りがあるためだそう。 (New Hanover Countyには主に4つの高校があるのだが、New Hanover高校やLaney高校はこれよりも高くなっている。) また、その

他の人種も少なく、non-nativeに対するESLの授業も行われていなかった。ESLの授業はぜひ見学したいと希望していただけに残念だった。

#### (標準校時 Regular Bell Schedule)

8:30~10:00	1限		
10:05~11:45	HR放送 / 2限		
11:50~12:18	A Lunch	11:50~1:20	B 3限
12:25~1:55	A 3限	1:25~1:53	B Lunch
2:00~3:30	4限		

これが標準の校時である。授業の間はわずか5分。休憩時間というより、移動時間というべきだろう。昼食時間も30分しか与えられていない。私なら音をあげてしまいそうな過酷なスケジュールだ。(実際、私もこの校時に沿って行動したのだが、昼食がのどにつかえてハンバーガー1個が食べられなかった。) そして、授業は90分4限になっている。日本の高校でも90分授業を採用しているところがあるが、私自身は教師として経験したことがない。いったいどんな組み立てで授業を行っているのか、実際に見るのが楽しみである。

## 5 Eugene Ashley High School (その2:授業見学①)

さて、最初にAshley高校に到着したのは8月19日の午後2時前だった。この日は午前中ずっと小学校・中学校のまだあどけない児童・生徒たちを見てきたので、廊下にあふれる高校生たちはひどく大きく見えた。そして、一列になって歩いてもないし、服装もなかなか派手。もう立派な大人だ。テレビや映画で見たような、まさにアメリカの高校の風景だ。なんとなく気圧されて、正直な話、明日からこの生徒たちと上手くやっていけるのか、たちまち不安になってしまった。

到着してすぐ、数学・世界史(Mr. Whiteheadの授業。彼は池田高校を昨年訪問しているので顔見知りだ)・AP Physics・家庭科(Hand sewing)・体育の授業を一気に見て回った。生徒数は、27名ぐらいが基本のようだ。日本より確かに少ないが、教室自体がそれほど広くないためか、生徒が着席したときの部屋の雰囲気にはどこか似たところがある。しかし、授業の中身で、日本とはずいぶん違っているな、という印象も受けた。それは、数学・世界史などの講義形式授業で、

生徒が顔を上げて教師に注目していることだった。私語を交わす様子もない。日本では、生徒がノートを広げて何かを常に書き込み、教師は生徒の顔ではなく頭に向かってしゃべっている光景がよく見られないだろうか。ここでは、教師と生徒が相互に、語りかけ・問いかけ・応答を繰り返し、interactiveという言葉がまさにふさわしい授業を展開しているのだ。

一方、AP Physicsの実験や家庭科のHand Sewingの実習授業では、また違った感想を抱いた。AP Physicsというのは、大学レベルの力学を学ぶ授業なのだが、ここでは5~6名のグループを作って物体の運動とベクトルの関係をデータとして集める実験のようなことをしていた(門外漢なので、あいまいな説明しかできない)。その生徒たちの様子が、グループによって様々で、どう見ても熱心とは言えないグループもある。Hand Sewingの実習では、個々の生徒が好きなことをしている。おしゃべりをしたり、何もせずに座っている者もいた。どちらも、教師は特に全体を統括する様子もなく、個別の指導を行っている。一部を見ただけで全体を判断することはできないが、日本の実験や実習はもう少し教師のコントロールが行き渡り、統一された手続きのなかで進められているように思う。

見学の後、校長のMr. Hugh Bradyに挨拶をして、長い初日が終了した。

## 6 Eugene Ashley High School (その3: 授業見学②)

8月20日(火)から、いよいよ各交流校に分かれ、それぞれ単独での本格的な学校見学が始まった。私は、曲がりなりにも英語の教師ということで、この3日間は一人で英語onlyの世界へと放り込まれることになる。不安と緊張の中、8時過ぎに学校に到着した。まず、私の世話係りをさせていただくメディアセンターのMs. Joanne Absiのところへ赴き、スケジュールを確認する。3日間をそれぞれ1日ずつ英語科の先生方3名が授業を見せていただけるとのこと。見学が、全て英語の授業(すなわち当地での国語の授業)では、限られた側面の観察しかできないので、当初希望していたESLの授業の代わりに外国語の授業も見学させてもらえるよう頼んでおく。

8月20日(火)

1限 Ms. Leslie Lucas English 11年生(Junior)

彼女の教室は面白い工夫がされていた。部屋の蛍光灯は点けず、ランプによる柔らかな照明を使っていて、少しほの暗い。もちろん、生徒が困るほど暗くはなく、十分な光量はある。壁には絵がかけられ、ホワイトボードの周囲にもシックな飾りが施してあり、独特の雰囲気醸成がなされている。生徒たちは、この教室に入ると自動的にMs. Lucasの世界に招き入れられるわけだ。そして、生徒机は教卓を中心に扇型に配置されていた。授業中は教師が教室の中心を自由に移動しながら、どの生徒との距離も等しく保ち、生徒に語りかけることができるのである。

授業は、宿題(virtueについてのプリント)のチェック・発表に始まり、前半はそれぞれの生徒が書いてきたessayに基づいて行われた。essayは、confusionなどのテーマを与え、その言葉からイメージをふくらませるといものである。ペアで意見を交換したり、クラスにessayを発表したりする。中でも、confusionからmaze(迷路)を連想し、自分が人生のmazeの中をさまよっているという生徒のessayが印象的だった。

授業後半は、Persuasive Speech(説得力のあるスピーチ)がテーマである。ここでようやく教科書が登場した。教科書といっても、電話帳並みの分厚く重いもので、何冊も持ち歩けるような代物ではない。生徒は購入するのではなく貸与されているとのこと。教科書を家に持ち帰ることは基本的にないそうだ。その教科書を開いて該当の項を読み進めるのだが、文学作品を鑑賞するわけではないので、Ms. Lucasが自分の考えをどんどんはさみながら、生徒に語りかけていく。生徒は意見を求められると指名されなくても挙手をして発言する。前にも書いたが、生徒は顔を上げて常に教師に注目している。教師が伝えるべきメッセージを持ち、生徒は教科書からではなく、教師からideaを受け取ろうとしているのだ。これは、Ms. Lucasが表彰



を受けたほどの優秀な教師であるからだけではないと思う。教師の話を中心して聞き、それをもとに自らの考えを発表するということが、小学校入学の時から、生徒たちに対して授業に臨む態度ととして徹底されてきた結果だろう。そこに教育風土の違いを強く感じた。

## 2限 Ms. Leslie Lucas English 9年生 (Freshman)

授業の前にHR放送が行われる。いわゆるホームルームというクラス単位はなく、諸連絡がこの時間を使って全校放送で行われている。この時間の授業担当者が提出物回収など、日本での担任の役割を果たしているらしい。10分弱の放送の後、そのまま授業が開始された。

2限目のこの授業は、生徒それぞれが自分で選んだペーパーバックの印象に残った部分を発表することから始まった。次にhomeworkのプリントに関する意見交換、さらに木曜日に行う語彙テストの説明 (literary term listというプリントから出題される) が続く。その後、文法書を使って英文法 (品詞の項目) の授業が行われた。「退屈だが、正しい文を書くために必要な知識です。」とMs. Lucasが弁解?の前置きをして始めたのが面白かった。説明の後、それぞれの品詞にあたる単語を、先程の生徒が持参しているペーパーバックから探し出す活動をしていた。私は自分の専門分野なので、英語も理解しやすく興味深く観察できた。最後にまたあの分厚い教科書が登場して、文学作品を鑑賞して授業が終了した。

90分という長さの授業だが、いくつかの活動に分けて行われるため、時間はあっという間に過ぎていく。組み立てがしっかりと考えられている。それに加えて、教室のホワイトボードにその日の活動項目が目標とともに明示されていたことは注目に値する。生徒は、今自分が何をしているか、活動の目標が何であるかを明確に知った上で授業に臨んでいるのだ。私自身もこれは大変重要な要素であると感じているし、授業者が心がけなければならないポイントだと思う。アメリカでは教師が自分の教室を持っているから、それを事前に書いておくことができるし、次の授業のために慌てて消す必要もない。実践を容易にする環境が備わっているのだ。教室が教師に割り当てられるシステムには、教える側にも授業を受ける生徒の側にもいろいろな利点があるように感じた。

## 3限 Ms. Leslie Lucas English 11年生 (Junior)

内容は1限と同じ。生徒数は18名とやや少なかった。ここまでEnglishというこちらでの国語に当たる主要教科の授業を3時間連続で見学して持った感想は次の通りである。

- ・生徒がノートにひたすら何かを書き連ねるという場面がほぼない。あるとしてもプリントにメモを書き込む程度である。生徒はとにかく教師の方を向いて、発言に聞き入っている。

- ・問題演習といった活動が見当たらない。つまり、用意されたテスト問題に正解を出すことを目標にしていない。正解・不正解ではなく、自分の意見を持つこと・その意見を発表すること・提示された意見について議論することが重視される。

- ・生徒を指名して発言させることはもちろんあったが、教師がクラス全体に意見を求めた時、生徒からの自発的発言がどんどん飛び出してくる。質問をするとたちまちうっむいて視線をそらすという日本ではおなじみの光景とは相当な違いを感じた。ただ、よく観察していると、自分から手を挙げて意見を言わない生徒もいたから、一般的な違いはあっても生徒に様々な個性がある点ではいづこも同じというところだ。

- ・生徒の私語がない。ペアワークなどの活動時はにぎやかになるが、そういった活動が終了するとき教師が"Be quiet. Shh!"と注意すればたちまち静かになった。他の授業でも同様だったし、生徒同士が"Shh!"と私語をする生徒に注意をする場面さえ再三見られた。人が話している時は私語をしないという当たり前のことがルールとして染み付いているようだ。(池田高校で、アメリカ人AETが生徒に"Shh!"と注意するのを見て、「日本なら小さい子供にしているやり方だね。」という話になったことがあったが、こちらでは誰もが本当にそうやって注意しているのを見て得心した。)

- ・Ms. Lucasのクラスだけの話だが、教室の後ろにソファが置いてあり、一人だけ生徒がそこに座って授業を受けていた。最初はペナルティーの一種かと思ったが、どうも違う。聞いてみると、その全く逆で、前の授業で優秀だった生徒にそこに座る権利が与えられるのだという。日本ならたちまち揶揄の対象にされそうな話だが、努



力の結果を出した者が正当な評価を受け、周囲もそれを当然と受け止める精神が根付いているのならば、素晴らしいことだと思う。

・Ms. Lucasの持ち授業数に驚いた。朝8:30から昼の1:20まで3コマ連続である。途中休憩は前述したように5分だから、一つの授業が終わると次のクラスの生徒がすぐ入室して来る。トイレに立つこともなく5時間ぶっ通しの授業が毎日続くのだ。こちらではこれが普通で、どの教員も1日3コマが標準らしい。1コマは準備のために空いているとはいえ、大変な勤務だなと思う。

#### 4限 Ms. Donna McQueen French

Ms. Absiにお願いしていた外国語の授業見学がこの日の午後に実現した。フランス語の授業である。午前中は、90分の授業全体を観察することに主眼を置いたので、各クラスとも簡単な自己紹介しかしなかったのだが、今度は外国語の授業だから異文化紹介として少し時間をもらって日本のことをしゃべった。

まず、池田高校で中学生用に用意しているパンフレットを配布し、日本の高校生活の説明から始めた。次に日本語の挨拶をいくつか練習し、最後に梅干を食べてもらった。最初はひどく緊張したが、興味深そうに聞いてくれる生徒たちを前にしゃべっていると少し生徒の反応を見る余裕が出てきた。一生懸命耳を傾ける生徒、なんとなく興味なさそうに聞いている生徒、ちょっと落ち着きのなさそうな生徒などそれぞれの個性が手に取るように分かってくる。日本の高校生と何の変わりもない。Ashleyに来た当初に感じた圧迫感は見事に霧消した。その上、話が区切りにさしかかるとあちこちで手が挙がる。疑問が生じると我慢がならないらしい。こちらが指名するまで手を挙げている。指名してやると、遠慮なく早口の英語で質問してくる。こちら必死で聞き取って答え、勉強は苦手だが積極性のあるような生徒には逆に質問を返したりと、私と彼らとの間で言葉のやりとりがどんどん進行し、もうすっかり彼らの教師になった気分だった。かなり打ち解けてきたところで、梅干をおもむろに取り出して説明した。生徒たちは興味津々だ。食べてみるかと水を向けると、待ってましたとばかりに手が挙がる。「一度に口に入れるな」とアドバイスしてから勇気ある数名の生徒に食べさせてみたら、大騒ぎ。目を白黒させる生徒もいて、

見ていた生徒も大喜びだった。

楽しいやりとりの中、瞬く間に時間が過ぎて、私の日本紹介は終了した。その後、Ms. Lucasのフランス語の授業と一緒に受けさせてもらった。大学以来のフランス語の授業である。

授業は、これもinteractiveに進行していった。教科書は使うが、口頭練習に多くの時間を割く。生徒もどンドンフランス語を話している。少人数の外国語授業かくあるべしといった内容だった。また、アクサントギユ・アクサン・グラーヴの体を使った覚え方を紹介するなど楽しく学ばせる工夫が随所に見られた。ノートをとるのは要所で教師の指示があったときだけだ。教科書を持ち帰らないので、家庭学習のために次回の単語テストのリストを写したりしていた。

Ms. McQueenとは授業の後で少し話を聞かせてもらった。フランス語は必修科目になっておらず、州の学力テストもないため、勉強という面では生徒に多くを要求できないところがあるそうだ。「私の目標は、生徒がフランスを訪問した時、フランス語でコミュニケーションができる力をつけることだ」と話しておられたのが印象的だった。また、校外でフランス語の演劇を見せる機会を持つなどの動機付けとなる活動にも力を入れていると説明していただいた。教える内容についてシラバスに関する質問もしたが、これについては本稿の後半に述べる。

## 7 Eugene Ashley High School (その4: 授業見学③)

8月21日(水)

### 1限 Ms. Amy Rottmann English II 10年生 (Sophomore)

この日は朝ホテルを出る時にちょっとした事情があって学校到着がかなり遅れてしまった。授業に途中から入る失礼なことになってしまったが、厚かましくもまた時間をいただいて昨日と同様の日本紹介をさせてもらったが、反応は上々。その後、残った30分だけ授業を見学した。ここではReviewのための質問が書かれたプリントを使ったグループワークが行われていた。なかなか賑やかで活気のあるクラスだ。ただ、珍しくおしゃべりな生徒もいて少しコントロールに苦労されている様子も見受けられた。

## 2限 Ms. Rottmann SAT Verbal 11~12年生

HR放送の後、授業が始まる。これはSAT(Scholastic Aptitude Test=大学進学適性テスト)のverbal sectionの準備を目的とした選択クラスである。生徒は11名と少なかった。この日はpresentationが行われた。2名1組で、これまでに学習した内容を取り入れたゲーム活動を考え、発表者2人でクラスを指導するという内容だ。例えば、1組目は数を表す接頭辞がテーマだった。まずOHPを使用して接頭辞の復習をクラスに対して行う。生徒にノートをとるよう指示していた。それから、クラスを2グループに分けてそれぞれに1組のカードを渡し、各グループの中で数を表す接頭辞と数字を組み合わせるゲームをさせる。発表者がそれぞれのグループに加わり指導していた。他には、ばば抜きのようなカードゲームや、ボードゲーム、教室のあちこちにカードを隠す宝探し(言葉と関係のあるところに隠していく)などの発表があった。それぞれ大変うまく構成されていて、彼らの独創性と、発表者・参加者ともにやらされているという受身的なところが全く見えない自主的な姿勢にいたく感動した。

## 3限 Ms. RottmannとのInterview

3限はMs. Rottmannの授業がなかったので、そのまま教室に残ってinterviewに応じてもらった。主に話したのは、評価・生徒の生活指導面・学習のシラバスについてである。以下、要点をまとめておく。

・評価は、学習計画に沿ってunitごとに小テストを行い、宿題点のほか授業点・発表点を加え、mid-term, finalに行われるテストによって行う。また共通の評価基準は特になくて、評価は教師自身の裁量によって行われるとのことだった。-

・生活指導面については、懲戒の対象となるような問題行動は校則で定められており、その対応はスクールカウンセラーや校長・Assistant Principalらのoffice staffによって行われる。とって、各授業担当者が何もしないわけではなく、授業における生徒の行動については一定の責任を持つ。授業態度などに問題があれば当然ながら担当者が対応するわけである。また、興味深かったのは、生徒が授業中に教室を離れ校内を移動する時に携行しなければならないという"Passport"の話だった。生徒はそれぞれ生徒手帳のようなメモ帳を持っていて、その"Hall Pass"というページに授業担

当者のサインをもらうのである。学校の安全管理という側面はあるのだろうが、そこまで管理する必要があるのだろうかと少々面食らった話だった。

以上の2点については、Ms. Rottmann がホームページ上に生徒向けの説明を詳細に記載されているので、参考として以下にその抜粋をあげておく。

### SAT Verbal

Mrs. Rottmann

Welcome! This class was constructed in order to help you become better informed about the vocabulary and strategies used in the verbal section of the SAT.

(中略)

All assignments will be displayed on the calendar beside the door. If you are absent it is your responsibility to look on that calendar and find out what you have missed. I will not remind you or nag at you to make-up your work. You will have 5 days from the day you return to school to hand in any make-up work. However, if you have an unexcused absence you can receive nothing higher than a 75 on make-up work.

### Class Assignments

Every Monday you will receive new words.

Every Friday you will have a Quiz

Two Novel Assignments will be given.

### Rubric

Quizzes : 35

Vocabulary Assignments/Notebook/Homework : 35

Novel Assignments : 15

Midterm : 15

### Expectations

1. Respect others and yourself.
2. All school polices apply in this class.
3. Use the bathroom before you enter my room!!!
4. Have fun and enjoy.
5. Complaints need to be made in private, one on one not in front of the class. (I will do the same.)  
If something has happened in your life that affects your role in this class, let me know. I can not read minds.
6. You are an adult until you prove otherwise.
7. Whining is unacceptable!

(後略)

#### 4限 Ms. Amanda Hobbsとのinterview

学校のカリキュラムやノースカロライナの高校で行われているシニア・プロジェクト（卒業論文のようなもの）について、担当のMs. Amanda Hobbsからお話を伺った。以下、その要約である。

・2学期制をとり、8月に始まり12月で終わる秋セメスターと1月から5月までの春セメスターがある。成績は9週間ごと、中間と期末につけられる（1年計4回）。授業については大学と同じく単位制になっている。日本と違って1年を通した時間割が学校から生徒に与えられるのではなく、生徒それぞれが自分に必要な科目の授業をセメスターごとに決めて単位を修得する仕組みだ。そして、各セメスターの中では、毎日同じ科目の授業を半年間受け続けることになる。教師にとっても同じことである。毎日同じ科目を同じ生徒を相手に18週間続けるのだ。集中的に勉強する効果は確かに高いと思うが、例えば体育を1セメスターだけ履修すると、1年のその他の期間は体育は全くなくなるわけだ。バランスということを見ると、この制度にも一長一短はあると思う。

・日本で学校ごとに作っているような1枚のカリキュラム表はないらしい。基本カリキュラムは州が提示していて、学校区がそこからガイドを作成し、各校はそれに基づいたカリキュラムで授業を行うそうだ。（詳細後述）

・シニアプロジェクトというのは、12年生が1年をかけ、自分の興味を持つ分野について教科の枠組みを超えて研究発表を行うという取り組みだ。テーマは基本的に生徒の自由に任される。「橋」の設計をした生徒もいると聞く。日本が導入し始めた「総合学習」の仕上げと言えり段階のプログラムである。レポート作成→製作・実践→ポートフォリオ→presentationの4つの評価ポイントがあり、最終のpresentationは民間から委託された審査員が行う。シニアプロジェクトの大きな目的は、進学・就職いずれにせよ、今後の社会での生活において、生徒が学んできたことをどれだけ発揮できるかを考えさせ、コミュニケーションスキルを向上させることにある。North Carolinaではかなり力を入れて取り組んでいる様子だった。Ashleyでは、今年が最初のシニアプロジェクトの実施になるため、スタッフはこの時期から12年生の指導に迫られているということだった。22日（木）の放課後も、プロジェクトの

スタッフが生徒の提出した第1次のテーマについて審査会議を遅くまで行っていた。

この日は、放課後に職員会議が行われ、私も出席した。会議冒頭に全教員の前で紹介され、1分だけスピーチをする。（中身の無いスピーチだったが、笑いだけは狙い通りにとれた。）職員会議は校長のMr. Hugh Bradyが司会進行を行い、内容も校長・副校長といった管理職からの伝達事項にはほぼ終始した。質問は自由になされていたし、雰囲気は和やかではあったが、議論を戦わせてから採決を行う日本のものとは随分趣の違う職員会議だった。

#### 8 Eugene Ashley High School（その5：授業見学④）

8月22日（木）

いよいよAshleyでの滞在も最終日を迎えた。少しでも多くの授業を観察したり、スタッフと話したりしようと気合が入る。

#### 1限 Mr. Marc Whiteheadとのinterview

彼はHoggard High Schoolの社会科教諭として、昨年、池田高校にいられている。その時も実に熱心に本校を見学され、案内役を務めた私も大変好感を抱いていた。その彼と再会できたので、今後、池田高校の生徒とAshleyの生徒の交流を進める具体策を検討するために時間をとってもらったのである。

最初、彼の授業についての話や世界史のシラバスについての質問をした後、本題のこれからの交流の可能性について話し合った。すると、彼は日本に興味を持っている生徒を集めてJapan Clubを立ち上げる計画を持っているというのである。数名の生徒がすでに希望しているらしい。それならば話は早い。Clubができたからメールの交換が生徒同士でできるように連絡を取り合うことにすぐにきまった。（帰国後しばらくしてから、10月末にJapan Clubができたという連絡が彼から入った。）

#### 2・3限 Ms. Toni Walker Adv. English III (Junior)

この授業でも時間をもらって日本紹介をした。反応はいつも通りだったが、生徒とのやり取りの中で校歌の話になったとき、生徒にAshleyの校歌を聞かせて欲しいと迫ってみた。校歌があるかないかでひとしきり





意見がでたあと、結局あるにはあるが歌える生徒が見つからないという話になった。すると、あごひげをたくわえたお洒落な一人の男子生徒が国歌なら歌えると言う。早速お願いしてみると、実に素晴らしい歌声で浪々とアメリカ国歌を聞かせてくれた。歌い終わるとクラス全員が拍手喝采である。お返しをしないで、私は無謀にも池田高校の校歌を披露することにしてしまった。お世辞にも上手いとは言えない私の歌を聴き終わると、心優しい生徒たちは温かく拍手を送ってくれた。合わせて5回の授業でアメリカの教壇に立ったわけだが、本当に素晴らしい体験だった。その中で最大の収穫は、「高校生はいつでも同じ高校生」であることに気づいたことだったと思う（こちらではよく"Kids are kids."と言うそうだ）。

Ms. Walkerの授業は、文学作品の鑑賞になっており、教科書の戯曲(drama)を読み進めていく形式だった。プリントを配布し、そこに書かれたCueにしたがって質問がされ、生徒が答えていく(もちろん○×問題ではない)。ここでも教師が生徒を指名することはほとんどなく、生徒が自発的に発言している。また、質問も遠慮せず飛び出してくる。次に教科書の文をクラスで声を出して読む活動を行ったが、戯曲なので配役を決めて自分のセリフを読む形をとっていた。配役はその場で決めるのだが、生徒がどんどん買って出るのでほとんど時間のロスがない。軽快に授業は進行していった。日本でも見られる読解の授業なのだが、生徒が授業に臨む姿勢はやはり大きく異なっていた。Ms. Walkerは新人教員ということだったが、授業は全く危なげがない。生徒のコントロールも確かだし、進め方も堂に入っていた。

#### 4限 前半 Dramaの授業見学 9~11年生

##### 後半 Mr. Whitehead World History 9・10年生

見学最後の時間は、欲張って2教室を回った。前半は初日に時間の関係で見学できなかったdramaの授業。講堂の舞台上でリハーサルの真っ最中だった。クラスが2班に分かれ、それぞれ別の劇を演ずるとのことだった。しばらく様子を見た後、Mr. Whiteheadの世界史へと移動する。

世界史の授業ではincarnation(説明の内容は輪廻転生についてだった)がテーマとして取り上げられていた。授業の進め方がまたユニークである。彼はコンピュータのPower Pointというプレゼンテーションソフトを使う。教室の前左側に教師机があってその頭上にモニターが設置されている。そのモニターに説明や写真がスライドとして次々と映し出され、それと並行してMr. Whiteheadの言葉が続いていく。この方法だとスライドの前後の移動が自由に行えるうえ、板書の時間が節約できる。その分、説明や質問の時間が有効に使えるのだ。素晴らしいアイデアである。思わず自分の授業にどうやったら取り入れられるか考えてしまった。この授業も、教師と生徒の間で言葉のキャッチボールが行われるなか、軽やかに進行していった。生徒の質問も面白い。授業が進み、インドで牛が神聖視されている話になったとき、すぐに手を挙げてこう聞いたのである。「では、インドではマクドナルドのハンバーガーを食べるのか。」アメリカの高校生らしい質問である。

Mr. Whiteheadは前任のHoggardで表彰された優秀な教員であり、私自身がいつの間にか授業に聞き入ってしまうような素晴らしい授業だった。

#### 9 学習シラバスと教員の取り組みについて

最近、日本では説明責任という言葉が流行りである。学校についても説明責任のあり方が問われ始めたところだ。私自身は、学校の説明責任の大きな柱は教育内容の事前公開だと考えている。つまり、この学校の、この授業では何を目標に何を教えようとしているのかを、保護者・生徒・社会に対して明確にすることである。実際のところは、日本では学習指導要領に基づく検定教科書が学校教育の基本であり、学校あるいは教師個人が改めて学習シラバスを作らなくとも、どの教科書を採択したかを見れば、その説明責任はほぼ果た

されていることになると思う。また、このことが、日本のどこに行っても学校・教員の別なくほぼ均一な教育が受けられるという利点を持つのは確かだ。しかし、この体制を長く続けてきたことによって、何を教えるかについて一人一人の教師はそれほど悩む必要がなくなった。教科書どおりに進めばよいのだから。私自身も含め、学校現場の多くは「教科書で教えず、教科書を教えている」という批判に反論できない自分を感じているのではないだろうか。

一方、指導要領のように細部にわたって国全体の教育内容を規定する基準を持たないアメリカでは、どのように教育内容のシラバスが作られているのだろうか。そして、教師それぞれはどのようにシラバスに関わっているのだろうか。Ashley High Schoolで授業を見学させていただいた各先生方に、そのあたりの事情を聞かせていただいたので、ここで少しまとめておきたい。

まず、基本となるカリキュラムについては、国レベルではないが、州が主体となって策定した“Standard Course of Study”が存在する。この基本カリキュラムはホームページで閲覧できるが、質量ともかなり読み応えのあるものになっている。内容は多岐に渡るが、その主な役割は教科・科目の目標を述べることにあるようだ。この基準をベースに、それぞれの学校区（ここではNew Hanover County）の教育委員会が次のような各学校に対するカリキュラムの指針（Curriculum Planning Guide）を作成して配布している。

(例) ENGLISH 2    Credit: 1 unit

Students in English II continue to study communication in speaking and listening, reading and writing, and other media and technology. This course emphasizes explanation through research and communication. Texts include definitions, instructions, histories, directions, business letters, and reports. English II students learn about both classical and temporary world literature (excluding British and U. S. authors) Students are expected to refine their editing skills and to apply conventions of grammar and language usage.

ここから各教員が1 Semester・18週間にわたる毎日毎週の授業計画を作成し、学校に提出するというシ

ステムになっている。

今回、各先生方に見せていただいたシラバスは、どこまでを記載するかについて、人による差があった。ユニット（週）単位の予定を記したのもあれば、授業ごとの詳しい計画さえある。しかし、いずれにせよ、大変な労力を要するものだ。全てをお見せしたいが、数ページに及ぶものなので、一部抜粋したものを記載しておく。英文のままだが、是非一度ご覧いただきたい。こうして作成されたシラバスが、ホームページやプリントによって生徒に伝えられる仕組みである。

また、効果的な学習シラバスを作成するために、同じ教科の中での情報交換が学校内や学校区の中のWorkshopなどで行われ、授業案を共有するなどの交流が年に数回あるとのことであった。

以上を総合して考えてみると、日米双方とも一定の学習すべき内容を規定したシラバスに基づいて各教師が授業を行っているという点では大きな差はないことになる。しかしノースカロライナでは、それぞれの教師が自分の授業に関して学期を通した明確なビジョンを持ち、その授業計画を綿密に用意した上で学期のスタートに臨んでいる。このシラバス作成に関わる部分だけでなく、授業見学を通して垣間見た1コマの授業に対する準備の周到さも含めて考えると、彼らが学校本来の任務である教科指導に注ぐエネルギーの大きさには大変なものがある。

## 10 全体をふりかえって

学校見学と現地教員との交流を通じて、様々な感想を持ったが、最後に日本の学校教育との比較において特に考えたことを2点に絞って述べたい。

第1は、設備から人員配置にいたる学校経営のあり方である。ノースカロライナでは、教師がそれぞれ固有の教室を持ち（教室の数が多い!）、視聴覚機器やコンピュータ環境が充実し、教師が教科の学習指導に専念できる職員体制（生活指導・進路指導・カウンセラーなどを授業担当者以外が行う分業制）がとられている。つまり、学習指導をいかに効果的に行うかが学校経営の基本にすえられており、それが教師に期待されるものの中核をなしているのだ。

一方、日本では教科指導に加え、生徒指導・進路指導・道徳教育・行事など、さらには清掃にいたるまで社会生活の全ての側面を教え導くことが教員一人一人

に期待される。年々、これら教科指導以外の部分の比重が増し、さらに週5日制を迎えて日本の教師はますます忙しくなっている。必要とはわかっているにもかかわらずシラバス作成にかかる時間の余裕はとてもないというのが正直なところだろう。学力低下が叫ばれ、生徒の家庭学習時間がOECD加盟国中最低を記録するなか、日本の学校経営も学習指導を中心においたあり方を考える時期が来ているのではないだろうか。

第2は、授業の方法論である。ほとんどの生徒が私語もなく教師に注目し、積極的に発言して授業に参加する様子は誰が見ても好ましく感じられるだろう。ここアメリカでは、教師と生徒のinteractionが重視され、自分の考えを述べることを一番の成果とみなす授業が展開されていた（アメリカでも知識注入型教育の必要性が指摘されつつあるが）。

ここで指摘したいのは、ノースカロライナでは16歳までは義務教育であり、高校も小学区制をとっている点だ。つまり、様々な学力レベルの生徒があつた教室の中で一緒に学んでいるのである（単位制なので、クラスによる差はあるようだが）。そしてどの生徒も授業中のあるべき振舞い方を一様に身につけているのだ。

日本では最近になって変化の兆しはあるものの、授業の多くは伝統的に知識注入型だ。この方法が非常に効果を発揮した時期は確かにあった。私はこの方法をこれからも否定するつもりはない。しかし、現在、生徒の学習意欲の低下が指摘され、知識の定着の悪さが教師の嘆きとして聞こえてくる状況が生まれ、さらに

は授業中の問題行動から授業が成立しないケースさえあるように聞いている。第1の点として述べた体制の問題点も影響している部分があるだろうが、生徒の質が変化してきたと言われる今、生徒の意欲を高めることのできるより効果的な授業の手法（生徒に授業への積極的な参加を促す方法）を模索すべきではないだろうか。そして、授業を受ける大前提として、生徒が守るべきルールを公教育の初期段階から彼らに明確に示し、徹底していくべきだと私は考える。

## 11 おわりに

3日間のAshley 高校訪問の後、Ms. McQueen宅でのホームステイ、州都Raleighへ移動してのサマリーミーティング、最終日のExploris Middle School訪問と、瞬く間に時は流れた。

今回、GPSPに参加の機会を得て、私が学んだものは非常に大きい。文化は異なっている、生徒を育てるという同じ目標を持った教師同士としての交流は、私の視野を広げ、これからの日本での教育のあり方について多くのヒントを得た。

実際に自分自身がこのプロジェクトを体験した今、こういった交流が参加者の行う教育をさらに前進させる力を持っていることを私は確信する。ここに改めて、プロジェクトに携わってこられた先生方、そしてノースカロライナでお世話になった先生方に感謝の意を表したい。

(参考：Ashley High Schoolの先生方からいただいたシラバスより抜粋)

### English III Course Syllabus

Mrs. Rottmann

#### Objectives :

- \* Understand the history of the New World, Pilgrims, and Puritans (5.01)
- \* Recognize the authors' styles of that time period (2.01)
- \* Compare and contrast different authors view points (4.03)
- \* Recognize the elements of Puritan writing (5.01)
- \* Recognize and analyze lyric poetry (1.01, 5.01)
- \* Identify and understand figurative language (1.01)
- \* Identify allusions in Colonial writing (4.01)

August 13	Course Overview ; Rules and Procedures ; Personal Bulletin Board ; Book Distribution ; Vocabulary #1
August 14	"Vision and Voyage Unit" <i>The Sun Still Rises in the Same Sky</i> p20 ; <i>The Shy Tree</i> p22 ; <i>The Earth Only</i> p23
August 15	Parenthetical Documentation ; (Sand Painting Project) Computer Lab
August 16	William Bradford ; <i>The Mayflower Compact</i> ; <i>Of Plymouth Plantation</i> (Comic Strip)
August 17	(Compare Smith / Bradford p36) Olaudah Equiano <i>The Interesting</i> <i>Narrative</i> p57 (Reading Check/ Connecting student to student p65? overhead) (後略)

Course Outline - French Two - Mrs. McQueen  
Fall Semester - Ashley High School

By August 19

Complete review of French 1 : counting, date, time, weather, ownership, places, daily activities, likes, and asking questions. Reprise.

By September 5

Unit 1. Family vocabulary, professions, describing people, feelings, plans, venir de, etre, avoir, aller introductions, phone calls.

By September 23

Unit 2. Describe weekend activities, use er, ir, and re verbs, use the past tense with regular and irregular verbs, use voir, prendre, mettre, sortir, partir, and conjugate in the past with etre.

(後略)

### WORLD HISTORY

In a nutshell, here is what we will study this year:

#### UNIT 1 The First Civilizations

We will cover prehistory and the first civilizations, you will learn how people got in together and how those first civilizations gave us traditions and innovations that we continue to build on.

#### UNIT 2 Rome and Greece

The classical cultures of ancient Rome and Greece will be studied. Many of their traditions are still with us, and you will be surprised to discover how much you already know about these.

#### UNIT 3 The Middle Ages

The Middle Ages are next, European civilization went downhill, some, such as the Islamic, Indian and Chinese prospered.

## グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト 米国現地研修ジャーナル (2002年8月17日 - 8月29日)

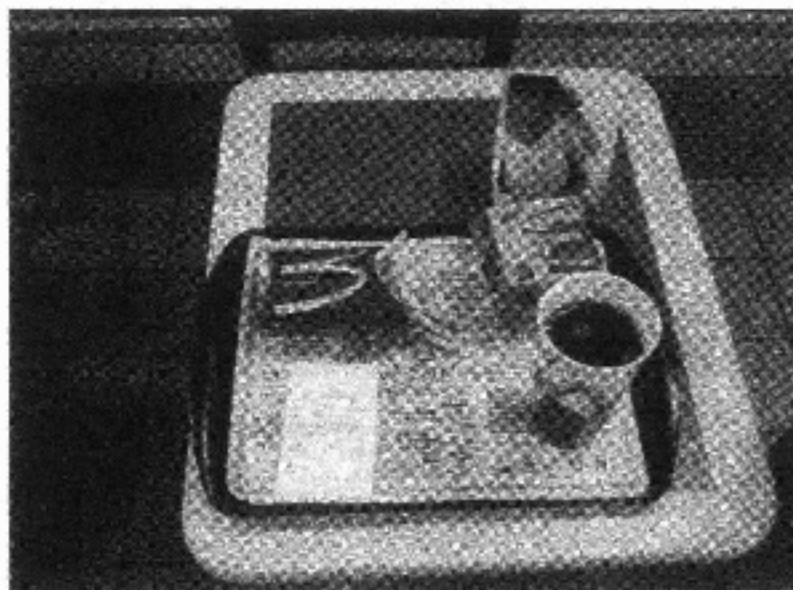
八尾市立東中学校 教諭 小林 孝 泰

### 8月17日 (土)

研修とはいえ、今回が初めての海外渡航。「アメリカを探訪できるぞ」という期待と、「中・高・大学と英語は学んだが、果たして会話がうまくできるのか」という不安を胸に抱きながら旅立つ。関西国際空港午後4時25分発のノースウエスト航空NW 70便は、デトロイトを目指し無事離陸。約14時間の空の旅が始まるのだが、日付変更線を越えるため現地到着予定時間はこれも午後3時30分。時差を考えて機内ではひたすら寝ることにした。

いつの間にか着いたデトロイトでの入国手続きの時、早くも不安が現実のものとなった。「相手のいうことをよく聞きながら…。やっぱりだめだ。早すぎて何を言っているのか分からない」と、焦るばかりであった。この場合はグループの人たちの助けを借りて無事通関できたが、「これから先、本当に大丈夫だろうか」と不安が大きくなった。

ノースカロライナ州の州都ローリーの空港ではスペンス、ウォーカー両教授の出迎えを受け、大阪地区のメンバーはウォーカー教授の車で一路ウィルミントンへ向かった。その車中で森田先生とウォーカー教授が、「日米の生徒・学生のどちらがよりindependentだろうか」という話をされており、それがみんなを巻き込む活発な議論になった。この時は結論こそ出なかったものの、この出来事が大阪グループ研修発表の主要テーマになった。



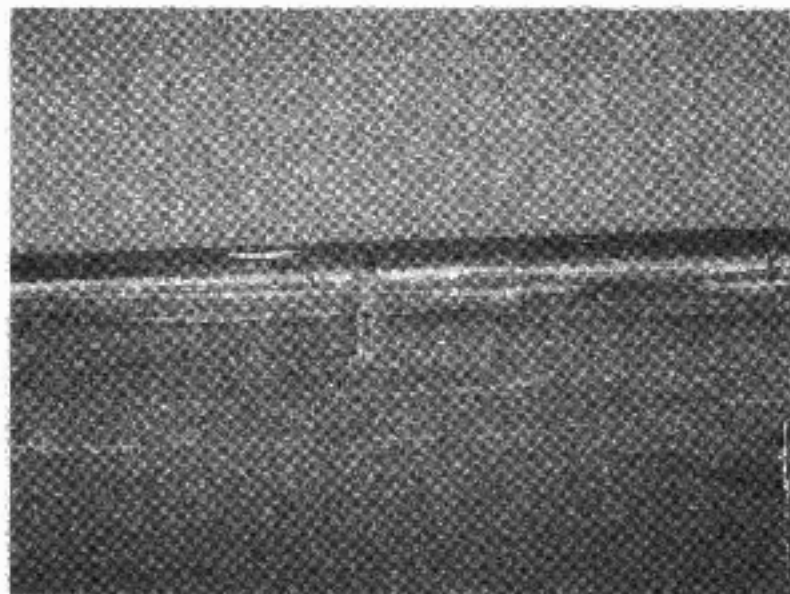
米国初の食事はマクドナルドで

また、ウィルミントンへ向かう途中、アメリカでの初めての食事となったが、適当な場所がなくマクドナルドに寄ったことはちょっとがっかりだった。ショッピングモールにも立ち寄り、翌日の朝食兼昼食を買い込み、深夜ホテルに着いた。しかし、長い1日の興奮が冷めず、荷物の整理も適当に翌未明まで語り明かした。

### 8月18日 (日)

アメリカでの最初の朝は、昨夜が遅かったにもかかわらず意外にもすっきりと目覚めた。心配していた時差ぼけもないようだ。まだ他のメンバーが起きてこないで、少しドキドキしながら一人でアメリカの朝を散歩する。「いきなり「ホールド・アップ!」なんてことにはならないだろうか」と、不安を覚えながらの散歩だったが、行き交う人に気軽に挨拶できたのは、ウィルミントンの街並みが醸し出すさわやかな雰囲気のおかげだろうか。それとも、気候・風土があまりにも大阪に似ていたせいだろうか。

午後、ウォーカー教授の案内で市内を観光して回る。大西洋を初めて目の当たりにし、森田先生と二人で泳いだことが一番印象に残った。また、大西洋の貝殻は日本のものより厚みがあることや、日本の海よりちょっぴり塩辛いと感じた。びっくりしたのは、グリーンフィールド湖に本物のアリゲーター(ワニ)が自然のままにいたことだ。



大西洋でひと泳ぎだ!

なお、この日の夕食は久しぶりにおいしい食事でありつけたのが何よりだった。

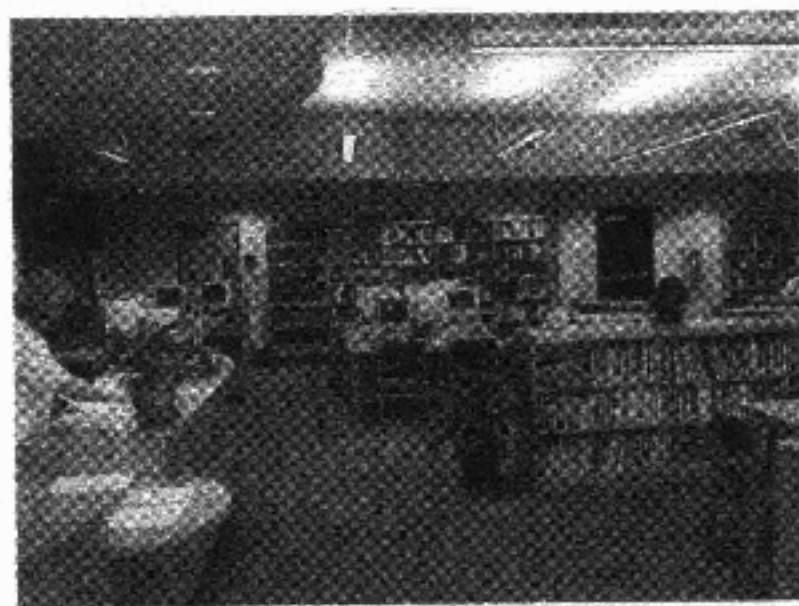
#### 8月19日（月）

研修第1日目は、グループのメンバー全員でグレゴリー小学校、ウィルストン中学校、アシュレー高校を訪問する。私は極度の緊張感と会話についていけないもどかしさで、頭の中がパニック寸前。その時、森田先生に「今日は情報を集めるというより、アメリカの学校の雰囲気慣れましょう」とアドバイスを受けた。これで肩の力が抜けたのか、日本の学校と比較しながら授業の様子や学校施設をゆっくり見て回ることができた。

各学校を回って一番感じたことは教育機器が充実していることだった。パソコンやOHPなどは1教室に1台設置されているし、図書室が単にライブラリー（本がたくさん集められている場所）ではなく、メディアセンター（パソコンなどを利用して情報をたくさん集められる場所）として機能していることに興味を引かれた。

この日の夕食はウォーカー教授の自宅に招かれての晩餐会。ウォーカー夫妻の心温まるもてなしに、幸せなひとときを過ごすことができた。

ホテルに戻ってからは研修報告会を行い、昼間の学校訪問で感じたことについてメンバー全員で意見交換を行い、明日からの研修内容などを確認した。「それにしても、他の先生方はなんと多くの課題を見つけ、明日に備えているのだろう」と、一人部屋に戻ってからは改めて自分の研修課題をまとめ直したため就寝が遅くなった。



メディアセンターの様子

#### 8月20日（火）

本日から個人研修である。私は一人、ベンダー郡にあるトップセイル中学校にお世話になった。幸いにも通訳（ケイコさんという日本人女性だった）が常時つくことになりひと安心。中学校のマイルズ先生にホテルまで迎えに来てもらい、いざ出発。

中学校の標柱（日本のような校門はない）には、私を歓迎する幕が張られており気の引き締まる思いであった。ただ、私自身の自己紹介を職員や全校生徒に向けてするものと勝手に思い込み、密かに文面を考えていたのだが、校長室に入るとブルーム校長との挨拶も簡単に3日間のスケジュールを渡され、いきなり研修活動が始まったのにはびっくり（結局、全体への自己紹介はなかった）した。

スケジュールの簡単な確認（といってもこちらは把握するのが精一杯だった）の後、早くもスクールウォッチングに連れ出され、その時に偶然行なわれていた7年生の先生方のミーティングに飛び入り参加、ビデオに収録して持って行った簡単な本校の紹介をすることになった。

次に、ラーソン先生の選択授業（farmというタイトルで生活体験といったところか）を見学したが、そのスケールの大きさには呆然とするばかりだった。なにせ学校内にfarm、まさに牧場を作ったというのだ。それも生徒とともに。「来年はダチョウでも飼ってみようかと思うんだ」と、こともなげに言うラーソン先生には恐れ入るばかりだった。

その後はトップセイル中学校の沿革や現在の様子についてマイルズ先生とブルーム校長が事細かに説明して下さった。ただ、その会話の早いこと早いこと、こちらはもちろんほとんど理解できないままに通訳の方の言葉を待って質問をさせていただく…という状況で、またもやパニック。写真やビデオを撮ることも忘れ、ひたすらメモをとることに集中した。

「昼食は気分転換に…」と、ブルーム校長お気に入りのレストランへ。ただ、腹は減っているものの食事はあまり喉を通らず、午後のミーティングのことを考えると気分は落ち込むばかりだった。

結局、この日はほとんどの時間を先生方とのミーティングに費やした。最後にやっと、ジャバンクラブの生徒に先ほどのビデオを使って本校の紹介を行ったのが、唯一生徒との交流が持てた時間だった。ホテルに戻っ



食堂前にある日本の紹介コーナー

てからの研修報告会では、研修の内容そのものよりも会話にならなかったことをしきりに話したが、「それは僕も同じだよ」と高校で英語を教える先生に励まされて、「明日もがんばろう」と気を取り直した。また、各先生方の報告から得たヒントをもとに、翌日の研修で聞いておきたいこと、やってみたいことなどを整理し直したため、この日も寝るのがかなり遅くなった。

#### 8月21日（水）

トップセイル中学校での研修2日目は、午前中に隣の高校やベンダー郡の学習センター(Learning Center)、教育委員会を表敬訪問した。特に、日本にはない学習センターの制度に興味を持った。

その後、地域の学校関係者や教育活動を支援しようという企業関係者で作る共同体(Cape Fear Partners for Education - Communities in Schools and Job Ready)の会合があり、出席させていただいた。というのも、この会合でブルーム校長とマイルズ先生が“言葉が脳の周辺組織に及ぼす刺激について～思考力・行動様式・読解力の相互作用～”の研究発表を行うからだ。全体の印象では、この会合は共同体の定例総会のような感じであり、事業報告やいろいろな活動計画が討議されていた。このような企業が教育活動をサポートするために共同体を設けるようなシステムも日本にはないのではないだろうか。アメリカのスケールは日本とかなり違うなあともここでも感じた。

#### 8月22日（木）

トップセイル中学校での研修最終日。本日の予定はいろいろな授業見学を行い、そのうち8年生の数学の時間に日本のそろばんの使い方を教える模擬授業を30



食堂でくつろぐ生徒たち

分程度行うことになっていた。ところが、朝の打ち合わせでいきなり「ぜひ6・7年生でも授業をやってほしい」という要請があり、結局3学年とも模擬授業を行うことになった。

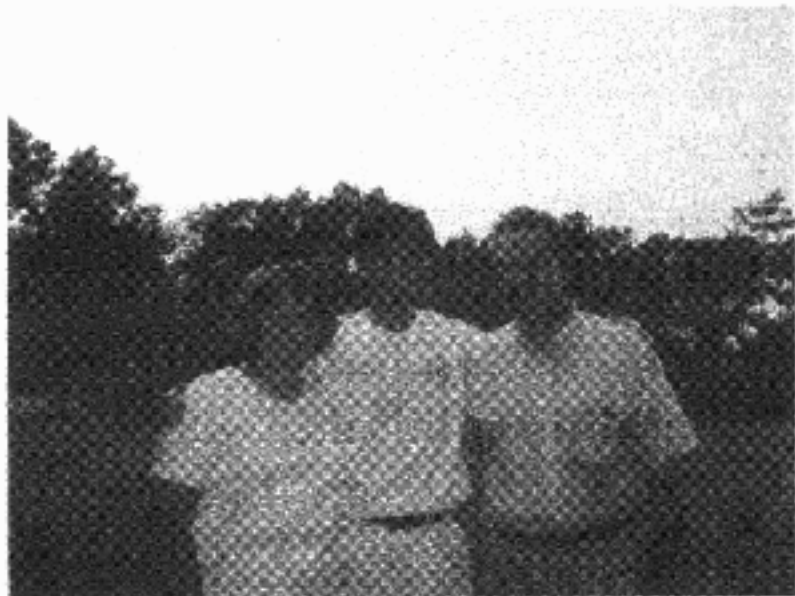
授業に関して総じて言うと、アメリカの生徒の授業に対する姿勢や反応の様子などはこちらが予想した通りで、日本の生徒とあまり変わらない印象を持った。それに、日本語交じりのあやしい英会話ではあったが、事前に簡単な指導計画を立てていったことが功を奏し、どのクラスも楽しい雰囲気の中で真剣に取り組んでもらえた。中には先生からそろばんについて質問され、盛り上がったクラスもあった。午後からはやっと落ち着いて授業を見学することができたが、時間があまりにも少なく、私が見たかった授業のすべてを見学できなかったのが残念だった。

最後に、今回の研修の最大目標であった学校間の協定書について打ち合わせた。トップセイル中学校も協定書の調印を望んでおられたので、話はすんなりまとまった。なお、調印式はこの研修の全体発表会の最後に行うことになった。これでやっと肩の荷が降りた思いであった。

ホテルに戻ってからの研修報告会でも、皆がほっとした様子で研修報告を行い、全体の研修報告会での発表内容を簡単に打ち合わせた後は、打ち上げを兼ねた夕食へと繰り出し、深更までおおいに飲みかつ語り明かした。

#### 8月23日（金）

午前中に何とか研修報告会の発表原稿を書き上げ、午後はショッピングに出かけようということでミーティングが始まった。ところが、いざ発表内容の検討



ウォーカー夫妻とパーティーにて

に入ると、あれもこれもと意見が飛び交い、なかなかまとまらないうちに時間が過ぎた。その時に思い出したのが“independent”の話であった。これを発表内容の中心にすえることで大まかな筋書きができた。

午後はショッピングの後、ウォーカー教授が中心になって各学校の先生方やお世話になった通訳の方々を招いた野外でのパーティーが催された。Pig-Pickingという料理を振る舞われたが、豚の丸焼きといったらいいだろうか。このおいしい料理と学校での研修が終わった気楽さから歓談に花が咲いた。また夜になってレイニー高校のアメリカンフットボールの試合観戦を行った。初めて見るアメフトの試合はおおいに興奮した。

ホテルに戻ると、もう少し細かく発表内容をまとめ上げようということになり、結局この日もベッドに入るのが遅くなった。

#### 8月24日（土）

本日から明日にかけてホームステイ。再び会話に対する不安が頭をよぎったが、『なるようになるさ』と少し開き直った気持ちもあった。ホストのアラン・ボイドさんは、高校の先生でサッカーの指導もされている、なかなかのアスリートだった。私もスポーツが大好きですっかり意気投合した二人は、プールに泳ぎに行ったり、ジョギングに出かけたりと、この日はいっぱい汗を流し、久しぶりに心地よい1日を過ごせた。また、「翌早朝にはサーフィンをやろう」とアランさんと約束していたので、外は嵐のような天候だったが心静かに早く寝ることができた。

#### 8月25日（日）

まだ、陽が昇る前にビーチに出かけ、サーフィンの



アランさんとビーチにて

手ほどきを受ける。私は初めての試みなので格好良くサーフィンとまではいかなかったが、きれいな朝日を見ながら波乗りの心地よさを味わうことができた。

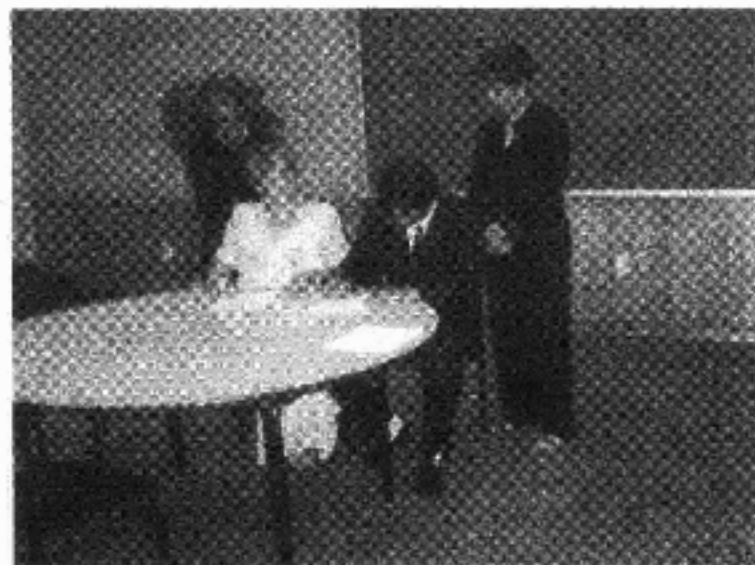
その後は私のリクエストに応じていただき、戦艦ノースカロライナ記念館を訪れた。その艦の中を回るだけでも大変だったが、アランさんは気持ちよく案内をして下さった。

正午にはグループ全員がUNCWに集合し、私はアランさんに別れを告げ、皆とともにローリーに向かった。

ホテルについてゆっくりする間もなく、明日行なわれる研修報告会での発表原稿の最終チェックや読み合わせにかなり時間を費やした。そのおかげで満足のいく報告書ができあがった（と思う）。

#### 8月26日（月）

研修報告会を前に緊張した面持ちで、会場のエクスプロリス博物館へ向かった。各グループの熱心な取り組みの様子や上手にまとめたすばらしい発表を聞き、『大阪グループもしっかりとやらなければ…』という思



トップセイル中学校と協定の調印



いがこみ上げてきた。もちろん、我々が行った発表は好評だった（と思う）。

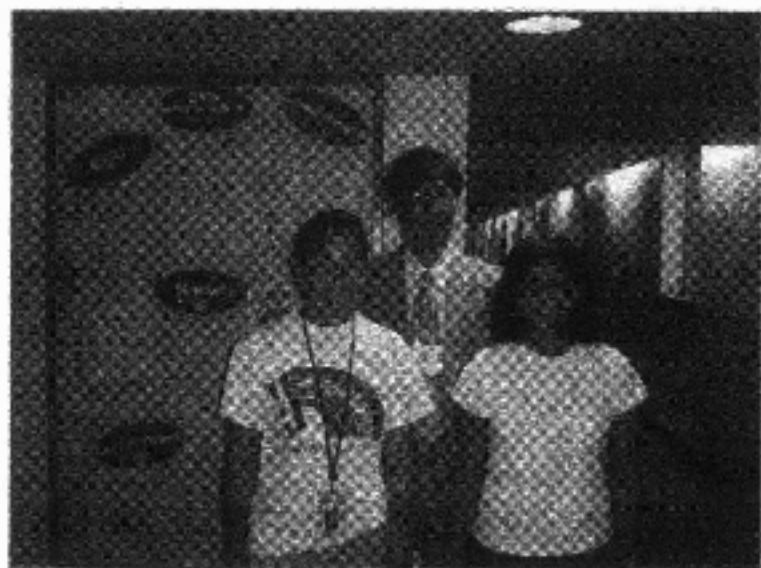
その後の質疑応答では、内容のある討議が繰り返され、次第に人格形成に関わる教育活動について話題が絞られていったが、時間の関係で十分な意見交換ができなかったのは残念だった。午後は企業からのプレゼンテーションが行われたが、研修発表が終わった私は気の抜けた状態だった。

夕食は研修に参加した全員の先生方と日本風レストランに行ったが、「この店はおよそ日本的でない」と感じたのは私一人だろうか。

その後、ホテルに戻ってからも気のあった先生方と夜の更けるまで部屋で語り明かした。

#### 8月27日（火）

研修の最終日は、エクスプローリス博物館立中学校（アメリカの多様性にはびっくり）を訪問した。この中学校では、トップセイル中学校とは違った独自のカリキュラムで授業が展開されており、斬新な発想がいたるところで教育活動に生かされており驚嘆した。また、



エクスプローリス中学校にて

学校案内を2名の生徒が行ってくれたことにも感心させられた。博物館を見学した後は、この州の教育委員会を訪問した。

夕方、最後にもう一度ショッピングがしたいという希望があり、皆でモールへと繰り出し、残りわずかなドル紙幣を使い切るためにいろいろな店を見て回った。ただ、翌朝が早いこともあって遅くならないうちに夕食を切り上げてホテルに戻った。

#### 8月28日（水）

空港での通関チェックに時間がかかるだろうという予想で、早めにホテルを出発した。「もうこれでアメリカの地をあとにするのか…」と思うと、もっとここにいたいという気持ちと家族の待つ日本に早く帰りたい思いが交錯し、ちょっと感傷的な気分になった。それでも、機内に入ると関空到着までの約14時間をどう過ごすかと思い、まずは久しぶりに本を繙いた。

#### 8月29日（木）

日付変更線を再び越え、関空到着予定の午後3時5分にあわせて、機内ではできるだけ寝ることのないように読書にいそしんだ。手軽な文庫本の3冊目に入った頃、日本の象徴的な山、富士山を空から眺めることができ、「この研修もとうとう終わりかぁ…」という思いに駆られた。そこで本を閉じ、この2週間をゆっくりと振り返ってみた。日本では味わえない貴重な体験、個人旅行ではできない教育現場での生きた研修、すばらしい人々との出会いなど、同じくらいの時間をかけないと整理できそうにもないほどたくさんの思い出を持って帰ることができた。それほどすばらしい研修に参加できたことを心から感謝する。ありがとう。

# グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクトの展開 トップセイル・ミドルスクールを訪問して考察したこと

八尾市立東中学校 教諭 小林 孝 泰

## 1. はじめに

本校は、このグローバル・パートナーシップ・プロジェクトに加えていただき2年目を迎える。ところが、今回、私の参加が決まったのは第1回事前研修会の2週間前だった。しかも、前回参加された先生はこの4月に転勤され、本プロジェクトに関する詳しい内容を知る方が誰もいない状況の中、「アメリカの様子を見てきたらいいじゃないか…」と教頭に勧められるまま、気軽に返事したことをその事前研修会で早くも後悔した。そこに集まった本プロジェクト参加者の中で、私だけが何か違った存在に感じられた。というのも、他の6名（うち1名は自費参加）の皆さんは、研修目的がしっかりしており、個人研修の内容も具体的であったし、なかには着々と準備を進めておられる方もいた。私について言えば、『アメリカという国に触れてみて、日米の学校現場の違いが分かれば…』といったぐらいに考えていたので、その時はただ恥じ入るばかりだった。しかし、この事前研修会で得た情報をもとに、すぐさま校長にかけ合い、職員会議の席上、本プロジェクトの意義を先生方に伝達し、これまで本校と交流のあったトップセイル中学校との協定を視野に入れたプロジェクト参加の必要性を強調した。その甲斐あって、校長から「今回の研修をきっかけに何とか協定を結べるように努力してきてほしい」との依頼があった。また、事前研修の回数を重ねるたびに、メンバーの皆さんの真剣な発表に触発され、ノースカロライナ州の教育制度やカリキュラムの内容を知るにいたって、私の個人研修計画も漠然としたものから、次第に具体的な内容を持つようになった。しかも、メンバーの中に授業の交流を計画されている方がいて、『私もアメリカの中学生を前に何かできることはないだろうか』と模索するうちに、一つのアイデアが浮かんできた。このようにして、本プロジェクト参加の動機があいまいだった私も、他の皆さんのおかげで出発直前になって、ようやくメンバーの正式な一員に加えてもらえるまでになったのである。

## 2. 研究の概要

本プロジェクト参加を決意した当初は、『アメリカを見聞できれば…』というぐらいに考えていた私も、事前研修会やそこに集まる方々のおかげで具体的な研究テーマや個人研修計画を立てることができた。

まず、私が見聞しておきたいと思ったこと、それは日本とアメリカの教育現場のどこが似ており、何が違っているのかということである。本や資料による比較よりも、実際にアメリカの地に立ち、自分の目で確かめてこそ分かることも多いだろうというのが、私をして本プロジェクトに参加させた大きな要因だったからである。

次に、日本では本年から新しい学習指導要領が完全実施された。学校週5日制、教科指導内容の縮減、総合的な学習の時間の創設など大きな変革が行われた。それに対して、アメリカには学習指導要領にあたるものがなく、果たしてどのように教育課程を編成したり、教科指導計画を立てたりしているのだろうかということに興味を持った。特に、私に関心を持ったのは、ノースカロライナ州のホームページに記載されている教科領域の多様性だった。国語 (Language Arts)、数学 (Mathematics)、理科 (Science)、社会 (Social Studies)、という日本でもおなじみの教科以外に、Computer/Technology SkillsやInformation Skillsといった教科領域があり、『実際にどんな教科内容で、どのような指導が行われているのだろうか、ぜひ知りたい』と思った。

最後にもう一つ、模擬授業を計画した。私自身は中学校で数学を教えているのだが、数学の授業では語学力不足の私がアメリカの先生に取って代わることは難しいので、アメリカにないもので何かできないかと考えた。そこで思いついたのが、日本のそろばんを使った四則計算のやり方を教えてみようということだった。このアイデアについては、他の皆さんや大学の先生方からも『ぜひやってみたらおもしろいのでは…』と好評だったので、計画を立てて実施してみることにした。こうして出来上がった私の個人研修計画は次の4

点である。

- ① 日米における学校現場の比較
- ② 教育課程編成についての考察
- ③ 特色ある教科の指導内容や方法についての考察
- ④ 日本のそろばんを使った模擬授業の実施

さらに、トップセイル中学校との交流を基本にした協定を結ぶことも、本プロジェクトに参加した大きな目的であったことも付け加えておく。

### 3. 研究の結果と考察

#### ① 日米における学校現場の比較

今回の研修では、1つの小学校、3つの中学校、1つの高等学校を訪問させてもらった。そこでまず感じたのは、どの教室にもパソコンが何台か設置されていることや、図書室が単に Library (本がたくさん集められている場所) ではなく、Media Center (パソコンなどを利用して情報をたくさん集められる場所) として機能していることである。もちろん、必要に応じて生徒が自由にパソコンを使うことや、インターネットを利用して情報を取り込めるようになっていた。本校の場合は専用の教室にしかパソコンはなく、いつでも自由に生徒がパソコンを使っていいわけではない。この点、かなり日米での差があるように思う。また、今の日本の中学生が公共物を大切にしない(本校だけかもしれないが) ことにも問題があるのかもしれない。

次に、学校職員の役割分担がはっきりしていることである。トップセイル中学校は生徒総数510名で、校長・教頭をはじめとして、主要教科(国語・数学・理科・社会)担当18名、選択教科担当6名、特別な授業の担当3.5名の先生方が勤務されている。その他にも保安官(Sheriff)1名、ガイダンス・カウンセラー1名、司書1名、アシスタントの先生が2名常勤されているし、ソーシャル・ワーカーと看護婦が週に1日勤務されている。日本では一人の先生が専門教科の授業のほか、選択の授業や総合的な学習の時間も担当していることと比べると、専門教科の指導に専念できるといううらやましい限りである。また、授業中に先生の注意を聞かずに授業の妨げとなる生徒については、他の先生や保安官がそばについたり、別室に連れ出して指導したりすることもあり、場合によっては教頭や校長が注意を促し、保護者への連絡は管理職が行うことになっている。こうした生徒指導上の問題についても、日本

ではほとんどの場合、教科担当や学年の先生方が行い、保護者への連絡は担任が行うのが普通である。生徒指導に関わる対処の仕方には、日米に大きな差があるように思う。ここで特筆すべき学習センター(Learning center)について触れておく。それぞれの郡には学習センターが1つあり、そこには素行不良だけでなく、極端に学業不振の中・高校生が集められ、おもに主要教科のうちで数学や国語に力を入れて、個々に応じたプログラムを作成し学習指導を行っている。また、学習センターに通わせるかどうかは、校長が最終判断を下すようになっている。こうした学業不振の生徒に対する支援体制の遅れや、その対応が学校まかせになっている今の日本では、成績分布の二極化が進んでいることもうなずけるといえるものである。

最後に先生の免許更新制度がアメリカにはあること、新任から5年目までは毎年更新、6年目以上の先生は5年ごとの更新制度になっていることにも触れておく。いずれにしても、いろいろなことを抱えすぎて疲弊をきたしている日本の学校教育制度の現状を見れば、アメリカの制度に学ぶべきことがあるように思う。

#### ② 教育課程編成についての考察

アメリカには日本のような学習指導要領はなく、果たしてどのような方法で教育課程を編成しているのだろうかという疑問について、トップセイル中学校ではたくさんの資料をもとに説明して下さった。数学に関して言えば、全米数学協議会(と訳せばいいのだろうか-National Council Teachers of Mathematics)が指導内容の基準を策定し、それをもとに各州で指導要領を作成(5年ごとに改訂)している。したがって、教育課程の編成については主要教科の場合、指導内容や年間計画がかなり詳しく書かれたマニュアルがあり、それをもとに各学校で取り組んでいるのが実状のようだ。

次に、トップセイル中学校の6年生の時間割について紹介する。

8:30~8:56	Reading Renaissance
8:56~10:20	Core 1
10:20~11:02	Core 2
11:02~11:44	Lunch
11:44~12:26	Core 2
12:26~13:54	Wheels
13:54~15:15	Core 3

ここにあるCore 1～3は主要教科の時間帯で、国語と数学は年間を通して行い、理科と社会は2教科を半年交代で行っている。Wheelsは選択教科で、トップセイル中学校ではComputer、Keyboarding、Farm、Art、Band (Music)、Physical Educationの選択授業が行われている。なお、7・8年生も基本的には同じ時間割で、昼食時間の関係で時間帯が変わるだけである。この時間割が毎日同じであるということには驚いたし、国語と数学に特に力を入れていることに注目すべき(日本では今、逆の現象が起こっている)である。そのことと関連しているのが学校評価のことである。これは、ノースカロライナ州の教育施策の一つで、8年生に国語(おもに読解)と数学の統一テストを行い、生徒の成績達成度に基準を設け、学校を評価していくものである。トップセイル中学校では最優秀校という一番いい評価を3年連続受賞しているようだ。ただ、学校評価は先生方の俸給にも関係があるので、この中学校ではかなり国語や数学の学力を重視して生徒に指導されている(実際この時の説明の中でも、先生から「push! push up!」という言葉が繰り返された)ように感じた。

最後に、朝の読書の時間(Reading Renaissance—“読書の復興”という意味だろうか)について簡単に触れておく。日本でもここ数年流行している朝の読書の時間だが、トップセイル中学校では毎朝約30分をその時間にあてており、自分で選んだ本を読んでいる。しかもトップセイル中学校ではReadingを重視している関係で、生徒が1冊の本を読み終わるとコンピュータを使って簡単なテストを受けさせ、合格するといくらかの点数が与えられるパソコン・ソフトを利用しており、合計点数の高い生徒については廊下の壁に名前が張り出される(こうしたやり方は他の学校でも見られた)ようになっている。マイルズ先生によると、「得点は単なる動機づけです」という説明だったが、学力偏重的なところのあるトップセイル中学校では果たして本当だろうかという気がしてくる。

### ③ 特色ある教科の指導内容や方法についての考察

この点については残念ながらトップセイル中学校では、独自の教科として時間割の中には組み込まれていない。その点について質問すると、「いろいろな教科の中に合科的に組み込んで指導している」ということであつた。確かに、生徒が気軽にコンピュータに向かって操作しているところを見れば、日本よりかなり進ん

でいるように感じられたし、誤操作しても自分でやり直している生徒も見かけたので、かなり使い慣れている印象を持った。ただ、国語や数学の学力重視のあまり、そうした教科領域に割く時間の余裕がないのかもしれない。

### ④ 日本のそろばんを使った模擬授業の実施

計画当初は、最終日の8年生の数学の時間を30分程度いただいて行う予定であったが、結局は3学年とも模擬授業を行うことになった。それでも、学年に関係なく生徒はそろばんに興味を持ってくれたし、真剣に取り組んでもくれた。その授業の中で気づいたことは、アメリカの場合、四則計算を暗算ですることが苦手な生徒が日本よりも多く、筆算を使っても特に乗法や除法になると日本の小学生の方が早いのではないかと思えるほどだった。それは、日本の場合、九九の結果を語呂合わせで覚えてしまうので、乗法や除法の筆算でも比較的早くできるが、アメリカではそのような語呂合わせがないから九九の結果をそのまま覚えなければならず、それで乗法や除法の筆算に時間がかかってしまうのではないかと思う。

## 4. 今後の展望

今回、本プロジェクトに参加した大きな目的であった、トップセイル中学校との交流を基本とした協定を結ぶことに関しては、思いのほかすんなりと話が進んだ。特に、ブルーム校長が協定を結ぶことについては以前から積極的に考えていたようだったので、協定書も急いで準備していただき、私が日本に旅立つ前に調印を済ませることができた。それは、本プロジェクトの全体研修発表会の後、私が本校校長の代理という形で調印式に臨むことになった。今後の展望については、やはりこの協定内容を具体的な交流計画にしていけることが最大の課題である。今のところ本校では、本プロジェクトに参加した成果を職員会議で伝達し、協定の内容について知らせることで終わっており、今後の具体的な交流計画については十分な話し合いができていない。これからはぜひとも、トップセイル中学校とメールなどを通じて意見交換をし、グローバル・パートナーシップの強い絆を築いていく方策を考えていきたいと思っている。

## 5. おわりに

夏季休業中の最後の2週間は、私にとってはこれまでにない貴重な体験ができた日々の連続だった。最初はどうなることかと心配することも多かったし、アメリカに渡ってからも私自身の語学力不足から十分な研修ができたとは言いがたい。また、研修内容の中にも少なからず意味の取り違えをしている部分もあろうかと思う。それでも、やはりアメリカの学校教育現場で実際に研修ができた意義は大きい。それは、単に日本とアメリカの教育制度の違いを知っただけではなく、そのことを通してよりよい教育活動を模索することが

できたからだ。

今、アメリカは学力重視の教育に偏りつつあるように思うし、逆に日本は本年から子どもたちに“生きる力”をつけようと新しい学習指導要領に基づいた教育活動を始めている。果たしてその行き着く先がどうなるのかはよくわからないが、本プロジェクトが日本とアメリカの教育活動の交流を促進し、よりよい方向を示唆することができるものだと、今回確信した。今後はさらに、このグローバル・パートナーシップ・プロジェクトが果たす役割が重要になるだろうと思うので、ぜひ継続されることを望む。